

「決闘者―エドゥアール・ドリュモンと
『ユダヤ的フランス』」

内
田
樹

Summary

Le Dueliste-Edouard Drumont et "La France juive"

Tatsuru Uchida

"La France juive" (1886) d'Edouard Drumont est l'un des classiques de l'antisémitisme moderne. Pour illustrer la criminalité et la déraison de l'idéologie raciste, il suffit d'en mentionner le titre en fronçant les sourcils. Mais, malgré la vente légendaire du livre, les études uniquement consacrées aux idées de Drumont sont peu nombreuses. Cet "Essai d'histoire contemporaine" contient, certes, beaucoup de fautes et de mensonges, mais ces défauts ne sont pas sans intérêt, car ils reflètent une mentalité typique de la fin de siècle. "La France juive" est un symptôme à partir duquel on peut sonder le désir caché du temps. Voilà notre hypothèse de travail.

D'après Drumont, tous les événements historiques s'expliquent par l'opposition traditionnelle entre les races sémite et aryenne. Les sémites sont responsables de tous les maux sociaux. Cette explication simpliste était peu inventive, mais cela ne l'empêchait pas d'exalter ses contemporains.

Ce qui a sauvé Drumont de la banalité est le fait qu'il était "dueliste". Drumont, maladivement myope et sans aucune formation militaire, n'a pas hésité à se battre en duel pour trancher les débats que son livre avait provoqués.

Toujours le même principe prédomine chez Drumont: tous les problèmes doivent être formulés "à deux termes." Ce que Drumont a exclu, c'est le "tiers": interventions divine et juridique, il détestait ce qui complique les choses.

Il n'est pas difficile d'y détecter le désir qui caractérise l'Anti-Œdipe. Nous pensons que s'y trouve le secret de la réussite monumentale du livre.

本論考は一九九四年六月二十四日、立命館大学第三共和政研究会において行われた講演の草稿に若干の加筆、訂正を行ったものである。冒頭で述べているように、この講演そのものは論者の過去の研究を要約したにすぎず、新たな知見はほとんどつけ加えられていない。ただエドゥアール・ドリュモンの事績と思想をコンパクトに紹介するような日本語資料がほとんどなく、フランス語の原資料も入手したいという事情を勘案して、関連領域の研究者の便宜のために、活字化して残しておくことにしたのである。

長く筐底に打ち捨ててあった論稿の再吟味と要約の機会を用意して下さった立命館大学の川上勉先生を始め諸先生にこの場を借りて感謝の意を表したい。

一・一

反ユダヤ主義者、エドゥアール・ドリュモン (Edouard Drumont, 1844-1917) については、これを主題的に研究したものが本国フランスにおいても少なく、日本でも専門的な研究はほとんど存在しない。私はたまたま一九八四年から八六年にかけて「エドゥアール・ドリュモンと反ユダヤ主義原理論」と題する論文を書いた機縁で、ドリュモンの著述と関連研究書についてはいささか資料的には恵まれている。そのため奇書『ユダヤ的フランス』について、ときどきお尋ねを受けることがある。乏しい知識ではあるけれど、この機会にエドゥアール・ドリュモンの思想と事績について、基本的な情報を以下にまとめておきたい。

はじめに断っておかなくてはならないが、私がドリュモンの本を読んだり、フランスにおける反ユダヤ主義の資料を集めたりしていたのは、かなり以前のこと、最新の研究動向には明るくはない。それゆえ以下の記述も、専門的な研究者からは、目配りの足りない点や掘り下げの不足な点が多々指摘されると思う。拝してご教示を待ちたい。

一・二

最初に、エドゥアール・ドリュモンとはいかなる人物であり、『ユダヤ的フランス』とはいかなる書物であるのかを理解してもらうために、いくつかの論評を紹介しよう。

「フランス・ユダヤ人に対するドリュモンのこの攻撃文書は一大センセーションを巻き起こし、売れに売れた。これはフランスの不幸のひとつ、全部をユダヤ人に帰した、憎しみにみちた論告である。⁽¹⁾」

これはカナダのフランス思想史研究者、マイケル・マラーラの論評である。

「歴史の説明原理という以上に、この本は人種差別主義を、世界像の一つに、あらゆる事象を解説する暗号表に、思考と存在のカテゴリーにまで高めた。(…)人種差別主義は教義というよりは信仰であり、反ユダヤ主義は主題というよりは神話である。フランス・イデオロギーの総体を作動させる神話である。⁽²⁾」

これは八〇年代にフランス・ファシズムについての再審を請求して物議をかもしたベルナルル・アンリ・レヴィの評。

「ドリュモンをナチの先駆と呼ぶのはやや言葉が過ぎるかもしれないが、彼の経験と思想が国家社会主義のフランスの淵源の一つであったと言うのは誇張ではない。⁽³⁾」

これはフランスの思想史家ミシェル・ウイノックの評。

「このかくも憎まれた人物を六〇〇万ユダヤ人の虐殺の（唯一のとは言わないまでも主要な）直接責任者とみなす権利がわれわれにはある。⁽⁴⁾」

これは『エスプリ』から。やや非論理的だが、心情的にはフランスのジャーナリズムの本音はこのあたりにあると言えるだろう。

ご覧のとおり、ドリュモンの『ユダヤ的フランス』の世評は芳しくない。そこから当然予想されるように、このように否定的な評価が下された思想家についての研究も多くない。まずごく手短に、ドリュモンについてのこれまでの研究史を概観しておこう。

ドリュモン論の第一に上げなければいけないのは、ジョルジュ・ベルナノスの『良識派の心胆を寒からしめた男』（Georges Bernanos, *La grande peur des bien-pensants*, 1931）である。

これはドリュモンに全面的な共感を示す立場からの評伝である。ベルナノス自身は生前のドリュモンと面識があったわけではないし、反ユダヤ主義運動にコミットしていたわけでもない。歴史的資料としてどれほどの信頼性があるのか分らないが、今のところドリュモンについてのまとまった評伝はこれしかない。

ドリュモンだけを主題に論じたものとしては民族主義系の歴史家、ボ・ド・ロメニの『エドゥアール・ドリュモンあるいは民族的反資本主義』（Beau de Loménie, *Edouard Drumont ou l'anticapitalisme national*, J. J. Pauvert, 1968）がある。これはドリュモンの諸作品や新聞記事からの抜粹に、そのときどきの政治的状況についてのコメントを付したもので、ドリュモンの全体像を把握する上ではなかなか便利なガイドブックである。ただし、これもまたドリュモンの思想を支持する強いイデオロギー的なバイアスがかかっている。六八年という年号から推測されるように、ボ・ド・ロメニは、当時のフランスの政治的混乱に乗じて、「反資本主義・反国家主義者」としてのドリュモンの「革命性」の再評価を狙ったようだが、果たしてその企図が成功したかどうかはつまりばりにしない。

この対極にあるユダヤ人の側からのドリュモン研究として、まず上げるべきなのは、レオン・ポリアコフの名著『反ユダヤ主義の歴史』である。ポリアコフはここでドリュモンの『ユダヤ的フランス』の歴史的な系譜と影響の分析を行っている。（Léon Poliakov, *L'histoire de l'antisémitisme*, Calmann-Lévy, 1977, Tome IV, pp.54-58）

ポリアコフ、ハンナ・アレント（『全体主義の起源』）、ノーマン・コーン（『シオン長老の議定書』）といった戦後の反ユダヤ主義研究者の「第一世代」は「生き残ったユダヤ人」たちによって構成されていた。この人たちは、いわば生き残ったものの責務として、自分たちの民族の上にふりかかった巨大なスケールの迫害の実相を記述しようとした。そのせいもあって、その記述はいくら客観性をこころがけても、どうしても犯罪的イデオロギーに対する「告発」のニュアンスが濃厚である。

七〇年代以降、それまで歴史研究上の「タブー」とされていたフランス・ファシズムについての研究が、若手の研究者を中心に開始された。

この時期に出現した反ユダヤ主義研究の「第二世代」は、興味深いことに、多くがフランス人以外の研究者であった。

ファシズム三部作（『モーリス・バレスとフランス・ナショナリズム』

（Maurice Barrès et le nationalisme français, Almand Colin, 1972.）

『革命的右翼（1885-1914）』（*La droite révolutionnaire 1885-1914*, Seuil, 1978.）『右翼でもなく、左翼でもなく』（*Ni droite ni gauche*, Seuil, 1978.）『右翼でもなく、左翼でもなく』（*Ni droite ni gauche*, Seuil, 1978.）

L'idéologie fasciste en France, Seuil, 1983.）によつて一九世紀末から第二次世界大戦までのフランスの右翼運動について、網羅的かつ画期的な研究を行ったゼエヴ・シュテルネル（Zeev Sternhell）はイスラエルの学者である。

ヴィシー政権の詳細な研究を行い、その反ユダヤ主義的本質を暴露した『ヴィシーとユダヤ人』の著者たち、ロバート・パクストンとマイケル・マールスはそれぞれアメリカとカナダの歴史学者である。（Robert Paxton & Michael Marrus, *Vichy et les Juifs*, Librairie générale française, 1993. Paxton, *La France de Vichy : 1940-1944*, Seuil, 1974.）

研究のイニシアティヴをとったのが外国の研究者たちであったということは、（のちにベルナル・アンリ・レヴィが『フランス・イデオロギイ』で執拗に指摘するように）フランス人研究者の側に、自国のファシズムを研究することに対するなんらかの心理的な抵抗があったからだと思われる。事実、ミシエル・ウイノックは、フランスにおける反ユダヤ主義とファシズムを研究するものは、「誇りと屈辱のいりまじった感情」なしには自国の歴史を回顧することができないと述べている。

そのミシエル・ウイノックは、批判的な立場からドリュモンを主題的に論じた最初のフランス人研究者である。ウイノックの『エドゥアール・ドリュモンと仲間たち―フランスの反ユダヤ主義とファシズム』（Michel Winock, *Edouard Drumont et Cie*, Seuil, 1982.）はドリュモンの思想をベル・エポックの大衆心理の要請したものととして分析した好著で、現在のところこの研究をドリュモン研究のスタンダードとみなすことができる。

これ以降もファシズム研究はいくつも出ているが、知る限りでは、ドリュモンを主題的に扱ったものはないようである。（ただし、さきほど書いたように最近の研究動向についてはあまり通じていないので、あるいは思いがけない学問領域でドリュモン研究が著されている可能性はある。）

二・一

エドゥアール・ドリュモンの思想形成の過程について、見て行くことにしよう。

エドゥアール・ドリュモンは一八四四年パリ市庁の下級官吏の子に生まれた。カトリックの王党派ブルジョワの家系に属していると本人は主張している。リセ卒業後、一時期セーヌ県庁に勤務するが、のち新興の活況を呈する新聞界に身を投じる。

ドリュモンが最初の深刻な政治的岐路に遭遇したのは、第二帝政の瓦解とパリ・コミューンの虐殺に立ち会った一八七一年のことである。祖

国の惨状を前にして青年ドリュモンは深い怒りと悲しみに襲われる。このときの衝撃がドリュモン「憂国の政治思想」の基本的な情動となる。祖国フランスは退廢の極にある。これがドリュモンの終生変わることはない現状認識だった。

軍人も貴族もコミューン派も、祖国を屈辱的な状況に追いやった点についてひとしく全員が有責であるとしてドリュモンは考えた。しかし最大の敵は彼が「良識派」(Bien-pensants)と呼んだ体制順応主義のブルジョワジーであった。

七月王政を支持し、ついでナポレオン三世を歓呼で迎え、コミューンの虐殺に加担したブルジョワたち。主権者が代わる毎に看板をつけ替えて権力にすりよってゆくオ波尔チュニストたちの「衰弱した階級」をドリュモンはフランスの退廢の端的な現れとみなした。

第三共和政下のブルジョワジーについてドリュモンはこう書いている。

「この陰謀家たちは自分たちが死守しているものさえ信じていない。彼らには言葉がない。彼らはものを考えないからだ。」⁽⁶⁾

ドリュモンは王党派に対しても容赦がなかった。ドリュモン自身は久しく王党派を以て任じていたが、現実の王党派が陰謀に明け暮れて、大衆を魅了するような政治的パフォーマンスの遂行能力がないことに対しては齒に衣をさせない批判を加えていたし、祖国を屈辱的な敗北に導いた軍に対してもドリュモンは容赦ない筆誅を加えた。

ブルジョワジー、王党派貴族、軍人、そのすべてがフランスの退廢の責任者として告発される。労働者に対してはドリュモンは情緒的には親

近感を感じている。しかし彼らもまた社会改革の主体たりうる能力を欠いている点においてドリュモンの批判をまぬかれることはできない。

「労働者たちは(…)新聞を通じて思考することに慣らされてしまつて、現実を直視し、理念と理念の関係を把握し、総体的な視点に立つ能力をどんどん失っている。」⁽⁷⁾

詮ずるところ、ドリュモンの現状認識は「今世紀は骨の髄まで腐っている」という言葉に尽くされた。

二・二

この悲観的な現状認識は彼の独創ではない。のちのドリュモンの著書の題名が暗示するように、一九世紀末のヨーロッパには「世界の終わり」という終末論的・黙示論的な感情が色濃くにじんんでいた。第三共和政下、世紀末のフランスは、産業の近代化、都市化、脱宗教化が急速に進行していた激動期であった。フランス人の多くは、急速に進行する近代化の先行きについて明確な見通しをもてずにいた。加速度的に時代は変化している、しかし、どういう法則に基づいて変化が進行しているのかは誰も説明してくれない。だからどう対処してよいかわからない。これが平均的フランス人に共有された不安のかたちだった。

人々とはかく「説明」を求めていた。単に現状を嘆いているだけでは足りない。社会理論であるためには、フランス社会の急速な変貌の原因と、その見通しが明らかにされなければならない。

一九世紀において、社会現象の「通俗科学的」説明は、基本的には二

つの原理に基づいてなされていた。一つは陰謀史観であり、一つは帰納法である。

陰謀史観とは、社会の変化は「その変化によって利益を受けることになる受益者によって陰謀的に工作された」とする歴史解釈である。社会の変化はある特定の集団によって意識的に統御されており、「どの集団が陰謀の主体であるか」という問いは「どの集団がその変化から受益するか」という問いとイコールである。

ドリュモンはじめ反ユダヤ主義者は「陰で糸を操っている人間のことを知らぬものたちが信じているほど世の中の仕組みは複雑ではない」というディズレーリの小説中の言葉を好んで引用するが、陰謀史観は複雑な事象を非常に簡単な定式で説明してくれる。

帰納法とは、単称言明から全称言明を引き出す論証方法である。過去のいくつかの経験的事実に共通するパターンがあれば、そのパターンは現在と未来についてもひとしく妥当するという考え方である。帰納法は一九世紀における公認の科学的思考であったから、一九世紀の社会理論は例外なくこの論証法によって構築されていた。

帰納法的思考とは、平たく言えば、ある解釈仮説を立てておいてから、その解釈に合う事例を列挙することをもって論証とする思考である。この思考方法の致命的欠陥は、事例の「選択」における解釈者自身の「予断」が問われないことにある。

しかし帰納法も陰謀史観もいずれも、一九世紀末においては十分に「科学的」な論証形式として認知されていた。この二つの論理形式には「読者に知的な負荷を与えない」というすぐれた利点があった。ドリュ

モンは社会理論の構築にあたって、当然のように当時の学術的論証方法を採用したのである。

彼の作業は、祖国の致命的な退廃の「責任者を特定する」ことから開始された。彼の論証は次のように進めらる。

- (1) フランスは墮落している。
- (2) この退廃については、誰かが有責である。
- (3) 退廃の有責者は、この墮落の受益者と同一者である。
- (4) 特定の受益者が複数の事例において繰り返し出現するようであれば、その受益者が現象全体の有責者である。

三・一

ドリュモンの反ユダヤ主義はこのような「科学的」な推論の上に進行的な。彼はあくまで理説の科学性にこだわった。そう言えるのは、ドリュモンが『ユダヤ的フランス』の発表以前は反ユダヤ主義者ではなかったことが知られているからである。

ドリュモンはながく『自由』(La Liberté)という新聞に勤めていたが、その新聞のオーナーはイサク・ペレイル(Isaac Pereire)というユダヤ人であり、『ユダヤ的フランス』の出版まで、そのオーナーとドリュモンはかなり良好な関係にあった。のちに批判者から「なぜ長い間ユダヤ人の新聞で働いていたのか」を厳しくとがめられたドリュモンは「ペレイルはユダヤ人らしからぬユダヤ人であったからだ」と苦しい弁明をしている。

ドリュモンが「有責者としてのユダヤ人」を「発見した」ことはレオン・ドーデの回想録からもうかがえる。

「ドリュモンは、その主著の出版以前、その爆弾の炸裂以前には、反ユダヤ主義的プロパガンダを口にしたことが一度もなかった。」⁽⁷⁾

むしろユダヤ人を張本人にした陰謀史観の書物はそれまでも多く存在した。オーギュスタン・バリュエルの『シモニー書簡』(Augustin Barruel, 1812)、アルフォンス・トゥースネルの『ユダヤ人、時代の王』(Alphonse Toussein, *Juif, Roi de l'époque*, 1845)、グーリュ・デ・ムーソーの『ユダヤ人、ユダヤ教およびキリスト教徒諸国民のユダヤ化』(Gougenot des Mousseaux, *Le Juif, le judaïsme et la judaïsation des peuples chrétiens*, 1869) など『ユダヤ的フランス』の先駆をなす書物はいくつも存在する。

ただし、フランス革命に始まる「フランスの没落」の張本人に擬せられたのはユダヤ人ばかりではなかった。ジャコバン派、フリーメーソン、プロテスタント、聖堂騎士団、啓明結社などなど、無数の「秘密結社」が「フランスをだめにした元凶」としてさまざまな論者によって告発された。

ドリュモンも当然、これらの各種「陰謀集団」による謀議の可能性を検証していたはずである。ドリュモンは一八八五年、『ユダヤ的フランス』の刊行の一年前になってはじめてユダヤ人による陰謀説の採用に踏み切った、とベルナノスは記している。

ドーデとベルナノスの証言を信じるなら、ドリュモンはおそらくしみつぶしに陰謀の「受益者」を検証した結果、フランス革命以後の社会

の・変・化・に・よ・つ・て・最・も・大・き・な・利・益・を・受・け・た・社・会・集・団・を・「・発・見・」・し・た・の・で・あ・る・。

だから『ユダヤ的フランス』は次の言葉から始まる。

「革命が利益をもたらした唯一のものはユダヤ人である。すべてはユダヤ人より来たり、ユダヤ人に帰す。これはまさに征服であり、ごく少数だが団結力のあるマイノリティによる一国民全部の農奴化である。

(...)一国民全体が別の国民のために働いている。その国民が財政的搾取の巨大なシステムを通じて他者の労働の利益を収奪しているのである。」⁽⁸⁾

この驚くべき事実の「発見」にドリュモンがここまで手間取った理由もあわせて説明される。

「フランスのほとんどすべての新聞、すべての出版機関はユダヤ人の手のうちにあるか間接的にユダヤ人に依存している。」⁽⁹⁾情報統制のせいだったのだ。

『ユダヤ的フランス』の論証はそれゆえ次のようにすすめられることになる。

「いかにして、ユダヤの影響の下で、古きフランスが消滅し、分解してきたかを、いかにして無私無欲で幸福で愛情豊かなこの国民が憎しみ合い、金を追い求め、飢えに死にかけている国民に変わってしまったのかを示すこと。」⁽¹⁰⁾そして「フランスの解体の中でそれまで健全であった器官に入り込んだ異物が果たした役割」⁽¹¹⁾を描き出すこと、これである。

いったん陰謀の元凶が仮説的に特定されれば、残された作業は、この

仮説を支持する事例をできるかぎり多く集めることしかない。いわばあとは機械的な「データ」収集の単純作業しか残されていない。以下二二〇〇頁にわたる論述は、ひたすら「ユダヤ人のフランス支配の実例」の羅列であって、論理的な展開は冒頭の数頁で終わる。

おそらくドリュモンは五〇〇〇頁の本を書くこともできただろう。彼が一二〇〇頁でいったん筆をおいたのは、それ以上厚い本を出すだけの経済的余力がなかったからに過ぎない。(ドリュモンはこんな本は売れるはずがないと思った版元の要求で出版費用の一部を自己負担していた。)

三・二

しかし『ユダヤ的フランス』は、出版後一年間で一一四版、一九四一年までの半世紀で二〇一版売を重ねて「一九世紀最大のベストセラー」となった。この事実が示しているとおり、この書物には凡百の反ユダヤ主義パンフレットには見られない「パワー」があったことは否定できない。

例えばアルフォンス・トゥースネルの『ユダヤ人、時代の王』は、左翼の立場から、ユダヤ人資本によるフランスの金融・流通の支配を実にきまじめに分析したもののだが、その売れ行きも社会的影響も、ドリュモンの本には比すべくもなかった。(レオン・ドードーによれば、「ドリュモンに先駆け、ドリュモンにヒントを与えたのは『ユダヤ人、時代の王』のトゥースネルだという人がいるが、それはまるで間違っている。トゥ

ースネルの本など、当時も今も誰にも読まれなかった。⁽¹²⁾」

では、『ユダヤ的フランス』を歴史的ベストセラーにした理由は何なのだろうか？

『ユダヤ的フランス』は大きく分けると三つの主題を軸に編制されている。

一つは伝統的な反ユダヤ的迷信。ユダヤ人はペストにかからないとか、カトリック信者の七倍の生殖能力を持つとか、タルムードには「ユダヤ人は異教徒を殺し、その財産を奪うように」という戒律が書かれているとか、ユダヤ人は体臭がきついとか、ユダヤ人は自分の子供を売るとか、売春はユダヤ女性の天職であるとか、ユダヤ人は頭の使い過ぎで脳の組成そのものが変質しているとかいう類の人種差別的フォークロアである。

これらはいずれもドリュモンのオリジナルではなく、なんらかの先行する民間伝承を繰り返しているにすぎない。このような類のゴシップだけで構成された『シオン長老の議定書』とその類書は、同時期ヨーロッパ各国で広く読まれていた。ロマネスクな想像力に訴えるという点では、『ユダヤ的フランス』は『議定書』に比肩すべくもない。とするならば、『ユダヤ的フランス』がベストセラーになった理由は他に求めなければならぬ。

同書の第二の主題は資本主義分析である。(ただしこの主題は『ユダヤ的フランス』ではそれほど深く掘り下げられてはいない。)それ以後の著書『世界の終わり』(*La fin d'un monde*, 1889)や『最後の戦い』(*La dernière bataille*, 1890)では、反ユダヤ主義というより、反資本主義・

反近代主義が前面に出てくるが、これらどちらかといえば「左翼的」な視点からする資本主義批判の書はいずれも『ユダヤ的フランス』の爆発的なセールスには遠く及ばなかった。

『ユダヤ的フランス』第三の主題であり、私の見るところ、この書物をベストセラーに押し上げた最も刺激的な論件は「アーリア人とセム人の永遠の対立」という図式であったと思われる。それは、この主題によって、第一の主題である宗教的な淵源をもつ神話的反ユダヤ主義と、第二の主題である近代資本主義批判が、「超歴史的本質」としてのセム人性を媒介にしてひとつに結びつくことになるからである。アーリア・セム対立図式を通じて、背馳する二つの思想が合流することになるのである。

ドリュモンの独創は、それまで水と油のようになじまなかった二つのイデオロギー、二つの社会的階層をひとつに統合したことにある。伝統的な「宗教的」反ユダヤ主義（すなわち「右翼的反ユダヤ主義」）と、近代固有の「経済的」反ユダヤ主義（すなわち「左翼的反ユダヤ主義」）を接合させたことにある。別の言い方をすれば、これは、民族主義（nationalisme）と社会主義（socialisme）をむすびつけたということ、つまり「国家社会主義」（Nationalsozialismus）の基礎を築いたということの意味する。ウィノックの卓抜な比喻を借りれば、ドリュモンの反ユダヤ主義は「巨大なイデオロギー的鍋」として機能したのであった。

三・三

ドリュモンによる「アーリア人・セム人の永遠の対立」図式とは、どういうものか。『ユダヤ的フランス』の第一章「ユダヤ人」はユダヤ人がいかなる「人種」であるかの分析に当てられている。分析は次のような確認から始まる。

「ユダヤ人を他の人間たちとは違ったものにしてしている本質的特性（les traits essentiels）とは何かをより注意深く、より真剣に考え、私たちの作業をセム人とアーリア人の民族的・生理学的・心理学的な比較から始めることとしよう。セム人とアーリア人ははっきりと分かれたれ、互いに決定的に敵対し合う人種の人格化であって、この両者の対立が過去の世界を満たしており、将来においてさらに世界をかき乱すことになるであろう。」

アーリア人とは「白人の優性種、イラン高原に発するインド・ヨーロッパ語族」であり、「ヨーロッパの国民は最も緊密な絆でアーリア人種に結びついており、そこからすべての偉大な文明は生まれた。」⁽¹⁴⁾一方セム人とは「もとはメソポタミア平原から出現したと思われる雑多な民族（∴）アラム語族、ヘブライ語族、アラビア語族」である。⁽¹⁵⁾

両者の対立は遠くトロイ戦争（一）に遡る。つねに戦争を仕掛けるのはセム人であり、敗北するのもセム人である。「セム人の夢、その固定観念はつねにアーリア人を隷属させ、農奴化することであった。」⁽¹⁶⁾

セム族を代表してアーリア人と戦ったのは、かつてはハンニバルやサラディンであったが、それが近代にいたってユダヤ人に代わる。それまでの暴力的な侵入に代わって、ユダヤ人には謀略を用いる。彼らはひそかに少数の集団でアーリア人の国に侵入し、しだいにその社会で枢要な

地位を占め、その社会の富を独占する。「巧妙にもともの住民をその家から追い出し、仕事を奪い、ソフトな手段で彼らの財産を根こそぎ取り上げ、ついで彼らの伝統、習俗、さいごには宗教を取り上げてしまうのである。」⁽¹⁷⁾

だからフランス史はそのまま「フランス社会のユダヤ化のプロセス」である。ドリュモンの歴史理解によれば（どのような資料に基づいているのかはつまびらかにしないが）十字軍以前の中世フランスにはすでに八〇万人のユダヤ人が居住しており、「現代よりはるかに富裕で、パリの半分を領有していた。」⁽¹⁸⁾そればかりか、儀式殺人を行ったり、井戸に毒を投げ込んだり、聖堂騎士団やフリーメーソンを手先に使って反教會的な陰謀を企てたりしていたので、ついに一三九四年にユダヤ人追放令が出され、フランスからユダヤ人は一掃されたのである。

「この疫病の排除により、フランスはすばやく信じがたいほどの繁栄に達した。（…）一三九四年からのユダヤ人追放期間、フランスは休みなく成長し、一七八九年フランスがユダヤ人を呼び戻すと共に、休みなき頽廃が始まるのである。」⁽¹⁹⁾

フランス革命はユダヤ人解放令によってユダヤ人をフランスの市民として正式に認知したからである。それと同時に「鋼鉄の世紀が終わり、黄金の世紀が始まる。」

「それまで諸国民は、祖国と榮譽と軍旗のために戦ってきた。これからのちはただイスラエルの民を富ませるために、イスラエルの民の許可を得て、イスラエルの民の満足のためだけに戦うことになるだろう。」⁽²⁰⁾ドリュモンによれば、パリ・コミューンの破綻は、コミューン派内部

のユダヤ勢力とヴェルサイユ側のユダヤ勢力の共謀によるものであり、第三共和政はその始めから完全にユダヤによって統制された政治体制である。このブルジョワ政体の本質は「金権政治」である。そこでは「すべては証券取引所から出て、すべては証券取引所に帰す。すべての行為は投機に還元される。」これがユダヤ人によるフランス制覇の歷程である。

セム人が例えばアジアやアフリカの征服にはそれほど熱中せず、ひたすらアーリア人の奴隷化に励むものには、むろん理由がある。それはアーリア人がセム人と全く相容れない対立的な性格を持っているからである。

アーリア人は「子供じみた巨人」(un géant bon enfant)にたとえられる。彼らは「熱情的で、英雄的で、騎士道的で、無私で、率直で、無思慮といつていいほどに信じやすく」、いつも夢みがちで、理想や伝説や英雄譚を糧に生きている。彼らの天職は「農夫、詩人、修道士、なかななく兵士」⁽²²⁾である。彼らにはビジネス・センスというものが全く欠けている。だから「彼らから財布を取り上げることほど容易なことではない。」⁽²³⁾

一方、セム人は「本能的な商人で、取引が天職であり、交換することと仲間を騙すことの天才」⁽²⁴⁾である。彼らはなにひとつ自分の手では造り出さず、他の人が開拓し、耕したところに現れて、その成果を搾取する。アーリア人はそもそも「搾取」ということの意味が理解できないので、されるがままになる。しかし、あまりに度が過ぎると、忍耐づよいアーリア人も怒り出し、「突然、めざめ、すべてを理解し、剣をとり、彼から

搾取し、略奪し、べてんにかけてセム人に恐るべき罰を与える。」⁽²⁵⁾そして、逆鱗に触れたセム人は、あわてて店をたたんで「霧の中に消え、穴にもぐって数世紀先にそなえて新たな陰謀をめぐらせる」ことになる。

三・四

このようなほとんど漫画的な人種神話がなぜ広範な支持を得たのか、なぜ二つのイデオロギーの接合の役割をはたし得たのか、これは注意深く考察してみる必要がある。というのは、これは人種論であるように見えながら、全く人種論の体裁をなしていないからである。

セム的な人種的特性とされるもののうちに、ドリュモンは（おそらく無意識的に）「伝統的なユダヤ人像」と「近代フランス人像」を二重化して書き込んでいる。つまりドリュモンが設定した「ユダヤ人」というカテゴリーには、人種的な「ユダヤ人」のみならず、「ユダヤ人化したフランス人」も含まれているのである。

ドリュモンがセム人種的な特性としてあげた性向をもつフランス人は、家系がどうであれ、信仰がどうであれ、「その血管のうちにユダヤ人の血が流れている」とみなされる。モンテーニュも小デュマも、ガンベッタもナポレオンさえも、ドリュモンの判定によれば「ユダヤ人」である。このような恣意的なレッテル貼りには、事実「誤爆」が少なくなかったらしく、私の手元の二十四版では何人かの「誤爆」の被害者にドリュモンが謝罪している。またのちにドリュモン自身がユダヤ人ではないか、という思わぬ攻撃に遭遇したとき、ドリュモンはこれに実証的な反

論ができずに困惑したことがある。

つまり『ユダヤ的フランス』はユダヤ人にすべての罪を着せることを目指しているが、論証の生命線である「ユダヤ人とは誰か」という差別化の基準において致命的に厳密性を欠いているのである。

しかし、この厳密性の欠如、レッテル貼りの恣意性は、戦略上必須のものだった。

なぜなら、もし厳密に人種的なユダヤ人だけを標的にした場合、攻撃すべき対象が激減してしまったからである。

『ユダヤ的フランス』の発行の二十年前の数値だが、一八六六年の国勢調査によると、フランスのユダヤ人口は総人口の〇・二%、八〇、〇〇〇人であった。その後、ロシア、東欧からボグロムを逃れて流入したユダヤ人がいるから、八六年段階では、もう少しふえていたはずだが、それでも半数以上はゲットーに逼塞する都市プロレタリアであったわけだから、この人口ではどうみても「国家をユダヤ人が支配していると主張するには少なすぎる数値」⁽²⁶⁾である。フランス社会全体をユダヤ人が支配しているという仮説を支えるためには絶対的に「頭数」が足りない。「ユダヤ人」の枠をどこかで大幅に広げない限り、ユダヤ人によるフランスの完全支配という仮説は成り立たないのである。（ドリュモンは中世フランスにおけるユダヤ人については八〇万（？）というような数字をどこかから持ってきたわりには、一九世紀フランスのユダヤ人口については口を噤んでいる。）

そこでドリュモンはユダヤ人枠の拡大のために「フランス人のユダヤ人化」という詐術的な言い回しを採用することになる。これによって原

理的には「古き良きフランス社会」を解体する流れに加担するすべてのフランス人は「ユダヤ人」とみなすことが可能になる。

ドリユモンはフランス社会の歴史的推移をすべて「社会のユダヤ化」という単純な陰謀史観によって説明し、かつ「ユダヤ人」の定義をきわめて恣意的に運用することによって、非常に単純な世界観とあわせて非常に効果的な組織原理・運動原理を手に入れることになった。

四・一

ドリユモンの反ユダヤ主義は見た目の雑駁さとはうらはらに、マヌーヴァーとしては、非常に洗練されたものである。「イデオロギー的な巨大な鍋」という比喻がよく言い当てているように、反ユダヤ主義のマヌーヴァーとしての有効性は、決して融和するはずのないイデオロギーと運動体を融合させてしまう点にあった。シャルル・モーラスは反ユダヤ主義のこの不思議な「触媒の力」について次のように語っています。

「反ユダヤ主義というこの天の助けがなければ、すべては不可能であるか、非常に困難であるかに見えた。反ユダヤ主義のおかげで、すべてはかたがつき、障害は取り除かれ、単純化⁽²⁷⁾した。」

どうして反ユダヤ主義は「触媒としての力」を持ち得たのか？

その理由の一つはユダヤ人が非常に特異なありかたをする社会集団だったことに存する。

知られているように、社会の不幸の罪をすべて、メンバーの一人にお

しつけ、それを排除することによって、社会の浄化と再活性化をはかるマヌーヴァーは「供犠」(sacrifice)と呼ばれ、人類の歴史と同じだけ古い。陰謀史観による「張本人」受益者の特定と、その排除はこの「供犠」の近代的なヴァリエーションである。

ルネ・ジラールは供犠的な仕方では排除される存在を「ファルマコン」(pharmakon)と術語化した。ジラールによると、「ファルマコン」とは、(1) 集団成員として何らかの欠格性をもち、(2) その欠格性がきわだって有徴的であり、(3) 暴力的な迫害を蒙ってもそれに報復するだけの政治的実力をもたない、の三点を条件とする。これに該当するのは、幼児、女性、廃疾者、障害者、戦時捕虜、王族などである。

しかし、それだけではない。もう一つファルマコンになりやすい重要な条件がある。それは、ファルマコンの性格特性と社会の問題の間に、何らかのアナロジーが成り立つことである。(例えば、社会のかかえる問題が、好んで「病氣」のレトリックで語られる場合には、ファルマコンには「病原菌」や「保菌者」という性格が求められる。)

ここにあげた四つの条件をユダヤ人はすべて満たしている。反ユダヤ主義の成功は、なによりも、他ならぬ「ユダヤ人」をファルマコンに指名したという選択の卓抜さにある。「ユダヤ人」は一九世紀末のヨーロッパにおいて、フ・アルマコンとしての理想的な条件を備えていたからである。

解放され、フランス市民となって、まだわずか一〇〇年たらず。同化が進行し、一部にはユダヤ教からキリスト教への改宗も見られたとはいえ、フランス人から見れば、ユダヤ人市民はそのファミリー・ネームだ

けからでも容易に識別することができた。そして中世以来の度重なる迫害に対して、一度たりとも反撃を試みたことがなかったという事実は、ユダヤ人が迫害に対して報復するだけの政治的实力をもたないことをはっきりと示していた。

社会成員としての資格が不十分であり、有徴であり、かつ報復の実力がない小集団であるユダヤ人はさらに拝金主義、物質主義、無神論、都市化、産業化、総じて近代化に向かう社会的趨勢一般の象徴でもあった。一九世紀末ヨーロッパでは、「近代化」と「ユダヤ化」の間にはアナロジイが成立していたのである。

『ユダヤ的フランス』に四〇年先だって、カール・マルクスはその『ユダヤ人問題』の中で「ユダヤ教は人間的自己疎外の最高の実践的表現」であり「普遍的な現代の反社会的要素」であると断言していた。それゆえ社会革命は、社会の欠陥そのものである「ユダヤ教からの社会の解放」として展望されたのである。近代社会の基本的趨勢を「ユダヤ化」と呼ぶ修辭上の習慣は、一九世紀末にはあきらかに定着していた。

さきに述べたように、十八世紀以降、フランスで刊行された陰謀史観の書物は「諸悪の根源」を必要に応じて、あるいはプロテスタントに、あるいはフリーメイソンに、あるいはイギリス人に擬してきた。しかし、これらはいずれも「現実にフランス社会の構成員であり、他と截然と区別でき、かつ報復の可能性がない小集団」というファルマコンの条件をみたすことができない。だから、もしこの時期に、社会の不幸は何らかの「邪悪な意志」の所産であるとする考え方に基づいて、社会革命を進

めようとする政治的運動があったとすれば、それが反ユダヤ主義と癒合しないでいることはほとんど不可能だったのである。

四・二

社会の欠陥がある少数集団に集約されていることは社会革命の基本的要件である。

この点についてドリュモン以上に明快なのは再びマルクスである。『ヘーゲル法哲学批判』にマルクスはこう書いた。

「社会の欠陥のすべてが、ある一つの階級に集約されている必要がある。ある個別的な集団が全員にとって邪魔者であり、全員の隷属の体现者である必要がある。社会のある個別的な層が、全社会に周知の犯罪を表象しており、そのせいでこの層からの自己解放が、普遍的自己解放であるように思われている必要がある⁽²⁸⁾。」

だが、革命理論のアポリアもここに存する。通常、革命理論は、「少数の」邪悪な要素のために、「全般的な」危機が到来しているという話型から開始される。そして、そのマイナス要素を特定し、剔抉することが革命の実践として提言されるのである。

この考え方の致命的な欠点は、「少数の邪悪な要素のために、全般的な危機が到来している」という命題の前半と後半が論理矛盾をきたしていることにある。つまり、もし悪の影響が一部にとどまっているのであれば、革命は緊急な課題としては認識されないはずであり、もし悪の影響が全体化しているのであれば、革命勢力は当該社会から社会成員のほと

・ん・ど・全・員・を・排・除・し・な・け・れ・ば・な・ら・な・い・は・ず・だ・か・ら・で・あ・る・。

だから供犠的発想に基づく社会革命の理説は、悪の淵源は「少数者」であるが、悪の顕現形態は「全体化」しているという矛盾を糊塗するためにつねに腐心することになる。

仮にドリュモンが言うように、社会全体が危機的なまでに「ユダヤ化」しており、キリスト教徒が雪崩うってユダヤ人化しているとするとすれば、社会の浄化のために、いったい誰を排除したらよいのだろうか？「ユダヤ人化したキリスト教徒」も排除してしまっているのだろうか？だが、もしそうすると、フランス国民のかなりの部分、おそらく半数以上をパレスチナに追放しなければならなくなる。これは救国の処方として実践的にはナンセンスである。（それに類することを実際に試みた革命権力が歴史上なかったわけではないが。）

それともやはり「ユダヤ化したキリスト教徒」と「ユダヤ人」は別物であるということになるのだろうか？いかに頹廃しようと、キリスト教徒と「ユダヤ人」の間には、つねに截然たる境界があるのだろうか？キリスト教徒は決して「ユダヤ人」にはならないのなら、「ユダヤ化」という言葉は実質的には何も意味しない。フランスの危機が「キリスト教徒」の単なる退廃と変質にすぎないのなら、警世の書の題名は『ユダヤ的フランス』よりも、『近代化したフランス』とか、『都市化したフランス』がふさわしいだろう。（そんな本は誰も買わないだろうが。）

このアポリアを逃れるために、ドリュモンは「ユダヤ人」という語を二つの定義でそのつど使い分けるといふ詭弁に訴えた。

つまり現状を説明するときに用いられる「ユダヤ人」の理論的定義と、

政治的・具体的提言において用いられる「ユダヤ人」の実践的定義が違うのである。

ドリュモンが総論的文脈で、「フランスはユダヤ化した」と言っているときそれは、ただ「フランス人はみな墮落している」ということを意味しているにすぎない。しかし「ユダヤ人はパレスチナに帰れ」とか「ユダヤ人の資産を没収せよ」とか各論的文脈においては、「ユダヤ人」にはフランス人は含まれていない。

論理学の用語を借りて言えば、ドリュモンは「ユダヤ人」という同一の名詞をクラスとメンバーの両方の意味でそのつど恣意的に使い分けているのである。

繰り返す言うように、これはドリュモンの創見ではなく、供・犠・的・な・社・会・革・命・理・論・に・共・通・す・る・詭・弁・で・あ・る・。社会革命の緊急性を訴えるためには、社会全体が「異物」の侵入によって冒されているという現状認識から始めなければならない。（もし「異物」が社会の一部分に局在するだけであるならば、ラディカルな社会変革は必要ないからである。）一方、その「異物」は社会全体に蔓延しながら、なぜか顕著な仕方で差別化されていなくてはならない。（もし「異物」が「異物」として誰によっても認知可能な仕方で局在していなければ、革命的暴力は発動のしようがないからである。）

遍在し、かつ局在するもの、社会全体を支配しておりながら、何の抵抗も組織できないもの、それが近代におけるファルマコン＝異物＝「ユダヤ人」の奇怪な属性なのである。ドリュモンの創見はかかるものとしての「ユダヤ人」を「発見」したことに尽くされる。

それゆえ、社会革命を担うはずの社会集団は「ユダヤ人でないこと」という以外にはいかなるポジティブな属性も持たない。極論すれば、ユダヤ人でなければ誰でもよいのである。彼らを統合するのは階級意識でもイデオロギーでも宗教でさえない。ドリユモンはこう書いている。

「被抑圧者たちが彼らの共通の敵であるユダヤ人に対抗するために連帯し合うとすればどうだろう？ 誰の上に現体制はもっとも過酷にのしかかっているか？ 革命的労働者とキリスト教徒保守派の上にある。一方はその死活の利害において苦しめられ、一方はその最も貴重な信仰において傷つけられている。⁽²⁹⁾」

革命的労働者とキリスト教徒保守派は共闘可能である。それどころかドリユモンは王侯と貧民の共闘さえ提言する。キリスト教徒の王侯貴族が、苦しむプロレタリアのために立ち上がり、ユダヤの資産を没収し、それを貧民に配分するという「鼠小僧」的なアイディアをドリユモンは提唱している。(モレス侯爵のように、このアイディアを真面目に実現しようとしたものもいる。)

ユダヤ人の排斥という唯一の綱領によって、革命的プロレタリアから王党派貴族までの「大連立」がかくして成立する。「誰がユダヤ人であるのか」を決定しないまま、誰が「ユダヤ人でないのか」を確定することは論理的には不可能だが、そんなことは気にもとめず、ドリユモンはこの「大連立」の「巨大なイデオロギー的鍋」のうちに、主観的に自分をフランス救国の主体であると思ひなすすべての人々を流し込んだのである。

エドゥアール・ドリユモンは『ユダヤ的フランス』の成功のあと、続けて続けに著作を発表してゆく。(『世論の前の《ユダヤ的フランス》』 *La France Juive devant l'opinion*, 1886. 『世界の終わる』 *La Fin d'un monde*, 1889. 『最後の戦い』 *La Dernière Bataille*, 1890. 『ある反ユダヤ主義者の遺言』 *Le Testament d'un antisémite*, 1891) しかし、新しい政治的、社会的事件を取り込みはしたものの、いずれも陰謀史観と事例の列挙というパターンの繰り返しに変わりはなく、理論的な新味はない。

一八九二年、ドリユモンは日刊紙『自由公論』(*La Libre Parole*)を創刊する。この新聞がパナマ事件のスクープで一躍発行部数を伸ばし、四年から始まるドレフュス事件の中で反ドレフュス派の中心的なメディアとなることは周知の歴史的事実である。その後のブーランジスムとのかかわり、モレス侯爵との交遊など興味深い事件はまだまだあるが、それを論じるだけの紙数はない。⁽³⁰⁾

最後につけ加えておきたいことがある。それはエドゥアール・ドリユモンは決して後世の歴史家が好んで戯画化したような三流のデマゴーグではないということである。

一つは人格的なことにかかわる。ドリユモンはあくまで自分が正義を実現しつつあると信じていた。彼はシニクな陰謀家タイプではなく、むしろ個人的には「俠気」に富んだ、情味の濃い人物だった。彼には奇妙な逸話がある。マチウ・ドレフュスの『回想録』によると、一八九四

年、アルフレッド・ドレフュス大尉の逮捕の直後に、当時の陸軍監獄司令であったフォルツィネッティ少佐は、大尉の兄マチウと面会した際、こう述べた。「大尉をとりまく状況は非常に厳しい。自分の見るところ、大尉のためになにごとかをなしうる人間は二人しかない。一人はベルナール・ラザールであり、一人はエドゥアール・ドリュモンである」⁽³¹⁾。

少佐の助言を容れて、マチウはベルナール・ラザールとコンタクトをとり、ラザールはのちにドレフュス派の論客として縦横の活躍することになる。ドレフュス事件が国論を二分するにいたる以前のある時期、ドリュモンは一個人の冤罪を雪ぐためであれば、政府と陸軍を相手にして戦うことを辞さない数少ないジャーナリストであるという評価を一部では受けていた。

非現実的な仮定だが、ドレフュス大尉がもしユダヤ人でなければ、ドリュモンはおそらく政府と陸軍に筆誅を加えるのを辞さなかったであろうとベルナール・ラザールは書いている⁽³²⁾。

のちラザールとドリュモンは決闘にいたる熾烈な論争を展開することになるわけだが、この論争は一九世紀末における反ユダヤ主義とシオニズムをめぐる非常に興味深い論争である。

あまり知られていないことだが、反ユダヤ主義とシオニズムは非常に深い関係にある。テオドール・ヘルツルの『ユダヤ人国家』がドリュモンの『ユダヤ的フランス』を意識して書かれたことはほぼ間違いない。ドリュモンの、「ユダヤ人はパレスチナへ帰れ、そこでならユダヤ人もその美と尊厳を見いだしうるであろう」という主張はヘルツルにほとんどそのままに取り入れられている。「ユダヤ人たちの出発はいかなる混乱

も危機も迫害も誘発しないだろう。むしろ彼らが出て行ったあと、国は繁栄を迎えるはずだ。というのは、キリスト教徒市民がユダヤ人が抜けて穴のあいた領域へ進出できるからである。このプロセスは混乱を避けるべくゆっくり進められるが、始まるやただちに反ユダヤ主義は終焉するであろう」⁽³³⁾。ユダヤ人が爾々とヨーロッパを去ったあと、繁栄が訪れる。ヘルツルとドリュモンはこの心休まる夢を共有している。

ベルナール・ラザールは、ドリュモンとの論争の過程で、シオニズムを支持する限り、反ユダヤ主義には理論的に勝てない、ということをし知らされる。ラザールは結果的にヘルツルのシオニズムと決別し、あらゆる形のナショナリズムを拒絶する立場に移行するわけだが、この過激化はドリュモンとの論争を契機にしたものであると私は考えている。

ラザールの死に際して、ドリュモンは論敵を高く評価した弔辞を公にしている。

「先に没したベルナール・ラザールは真のユダヤ人だった。(…)彼はユダヤ人として思考し、行動した。(…)私たちの願いはただひとつ、ベルナール・ラザールがユダヤ人の名の偉大さと義務に対して抱いたほどの考え方をキリスト教徒も自らの名の偉大さと義務のために抱いてくれることである」⁽³⁴⁾。

これに触れて、ベルナール・ラザールの親友であったシャルル・ペギーは、「ベルナール・ラザールの真価を理解していたのはエドゥアール・ドリュモンただ一人であった」と述べている⁽³⁵⁾。

ベルナール・ラザールについては最近研究が進んでおり、主著『反ユ

「ユダヤ主義」その歴史と原因』(*L'antisémitisme, son histoire et ses causes*, Léon Chailley, 1894) が約一〇〇年ぶりに改版された他(*Bel-fond*, 1990) 反ユダヤ主義、シオニズムに関する当時のラザールのテクストを網羅的に採録した『ユダヤ人と反ユダヤ主義者』(*Juifs et anti-juifs*, Allia, 1992) も刊行されている。(ドリュモンとの論争のテクストもここに収録されている)

さらにネリー・ウィルソンの詳細な研究 (Nelly Wilson, *Bernard Lazare*, Albin Michel, 1985) に続いて、九二年にはジャン・ドニ・ブルダンも大冊の伝記を刊行した。(Jean-Denis Bredin, *Bernard Lazare, de l'anarchiste au prophète*, Editions de Fallois, 1992)

これまでの研究では、残念ながら、ドリュモンへの論及に特に見るべきものはないが、今後のラザール研究の成果として、ドリュモンに別のパースペクティヴから光が当てられる可能性はある。

五・二

もう一つ言い添えておきたいことは、ドリュモンの反ユダヤ主義は論理的な破綻にもかかわらず、むしろ非論理的であるがゆえに、フランス人大衆の無意識的な欲望にみごとに答えていたということである。

ドリュモンの反近代主義は古代社会への回帰という不可能な夢を情緒たっぷりにうたい上げたものだが、さきに触れたアーリア人の性格規定に顕著に見られたように、このイデオロギーの根本にあったのは、社会的レヴェルにおける「古代回帰」願望、個人的レヴェルにおける「幼児

回帰」願望であった。

ドリュモンが理想化したのは、身分が固定し、職業が固定し、いかなる変化も起こらない農耕社会だった。「無数の伝統的な絆で結ばれ合い、支え合い、愛しあっていた社会」、「全員が餓死するときの他は誰一人餓死しない社会」、それは収奪も競争もないかわりに進歩も成長もない完全に停滞した社会である。

ドリュモンの反ユダヤ主義は歴然と「退行」的である。生暖かい停滞のうちで目を閉じて、母なる大地に包まれ、同胞と睦みあいながら、なかば眠りながら生きるというドリュモンの描いた理想社会は、きわだって反近代的であり、それゆえ同時代人に熱狂的に支持されたと私は考えている。

先に列挙されたユダヤ人についての歴史的コノタシオンの中でひとつ言い落とされていたことがある。それはユダヤ人がヨーロッパ人にとって精神分析的な意味においてつねに「父親」だったということである。

ユダヤ人は中世以来「幼児を虐待する老齢の男性」というかたちで繰り返し図像的に表象されてきた。アーリア人がドリュモンのいうように「幼児」巨人 *un géant bon enfant* であるとすれば、セム人は「子供」を騙し、いたぶる父権的な存在への憎悪を投影していたはずである。ノーマン・コーンは、反ユダヤ主義は、「父親」的なものへの憎しみ、幼児退行への固着を濃密に含んでいると指摘している。

『ユダヤ的フランス』は「アンチ・オイディプス」的なメタファーの宝庫である。進歩も成長も変化も、貨幣も法制も言語も、すべて「ユダヤ的」だとドリュモンは書く。フランス人はそんなものを必要としてい

ない、フランス人はただ母なる大地に根をおろしたまま、なま暖かい眠りのうちにとどまりたいだけなのだ。幼児の欲望をこれほどむきだしにした書物は、おそらく一九世紀においても例外的なものであったと思われる。

ドリュモンの決闘好きは、その幼児退行性の際だった徴候である。ドリュモンは『ユダヤ的フランス』によってひき起こされたいくつもの名誉毀損事件の解決を、第三者の裁定に委ねることを忌避し、しばしば決闘による決着を求めた。ラザールとも、クレマンソーともドリュモンは剣や銃を交えた。

もし「決闘」(duel)がジャック・ラカンのいうような意味で「双数」(duel)的なものであるなら、決闘への固執は、「法、第三者、他者」つまりラカンの「父の名」父の否」の排除を意味することになるだろう。エドゥアール・ドリュモンの社会的影響力は、彼が「反抗する子供たちのヒーロー」であった『ユダヤ的フランス』のときにピークにあった。そして彼が、しだいに社会的名士となり、代議士となり、ついにはアカデミー・フランセーズに立候補するころ、つまりドリュモンが「悪い兄」であることを止めて、フランス人に教えをたれる「謹厳な父親」に変容するに至って、すっかりしぼんでしまった。そして一九一〇年代の読者たちは、新しい「悪い兄」、シャルル・モーラスのうちに次代のヒーローを見いだしてゆくことになるのである。

【注】

(1) Michel Marrus, *Les Juifs de France, à l'époque de l'affaire Dreyfus*,

Calmann-Lévy, 1972, p.166.

(2) Bernard-Henri Lévy, *L'Idéologie française*, Grasset, 1981, p.108.

(3) Michel Winock, *Edouard Drumont et Cie*, Seuil, 1982, p.58.

(4) Jean Bastaire, *Drumont et l'antisémitisme*, in *Esprit*, 1964, mars, p.477.

(5) Georges Bernanos, *La Grande peur des bien-pensants*, Grasset, 1931, p.38.

(6) Edouard Drumont, *La France juive*, Marpon & Flammarion, 1886, t.1, p.524.

(7) Léon Daudet, *Souvenirs politiques*, Albatros, 1974, p.17.

(8) Drumont, *op.cit.*, p.vii.

(9) *Ibid.*, p.15.

(10) *Ibid.*, p.xvi.

(11) *Ibid.*, p.xvii.

(12) Daudet, *op.cit.*, p.17.

(13) Drumont, *op.cit.*, p.5

(14) *Ibid.*, p.6.

(15) *Ibid.*, p.12.

(16) *Ibid.*, p.7.

(17) *Ibid.*, pp.8-9.

(18) *Ibid.*, pp.146-147.

(19) *Ibid.*, p.186.

(20) *Ibid.*, p.329.

(21) *Ibid.*, p.516.

(22) *Ibid.*, p.9.

(23) *Ibid.*, p.11.

(24) *Ibid.*, p.9.

(25) *Ibid.*, p.12.

(26) cf. B.Blumenkranz, *Histoire des Juifs en France*, Privat, 1972, p.348.

(27) Charles Maurras, *L'Action française*, 28,mars, 1911.

(28) Kark Marx, *Zur Kritik der Hegelschen Rechtsphilosophie, Marx-Engels Gesamtausgabe*, Bd.2, Dietz Verlag, 1982, p.180.

- (29) Drumont, *op.cit.*, pp.516-518.
- (30) cf. ドリュモン思想と事績については、以下の拙稿において論及されている。「エドゥアール・ドリュモンと反ユダヤ主義原理論」(『東京都立大学佛文論叢』一、二、三号、一九八四―八六年)、「ベルナール・ラザールとユダヤ民族主義」(『東京都立大学人文学報』第二六五号、一九八四年)、「脱出する者」とりのこされる者」(『ユリイカ』一九八五年八月号)、「モレス侯爵―ある冒険的反ユダヤ主義者の肖像」(『ユダヤ・イスラエル研究』第十一号、日本イスラエル文化研究会、一九九〇年)
- (31) Mathieu Dreyfus, *L'Affaire telle que je l'ai vécue*, Grasset, 1978, p.78.
- (32) cf. Bernard Lazare, *Une lettre*, in *Libre Parole*, 19, nov., 1896.
- (33) Theodor Herzl, *L'Etat juif*, Stock, 1981, pp.60-61.
- (34) Drumont, *Un Juif*, in *Libre Parole*, 5, sep. 1903.
- (35) Charles Péguy, *Notre Jeunesse*, in *Oeuvres Complètes*, III-IV, p.111.

(原稿受理一九九四年十二月一日)